

五雲会

平成三十一年四月二十日(土)
開演 十二時(正午)
開場 十一時
於 宝生能楽堂

演目の解説

能「志賀」(しが)
当今に仕える臣下が、桜の盛りを見ようと志賀の山越えにかかると、薪に花を添え花の陰に休む老人と男に出会います。臣下は風流な老人に言葉を掛け、卑しき山人のその風情を褒めます。それに答え老人は和歌の徳などを語り、何となく大伴黒主の名を仄めかして消え去りますが、臣下が桜の下に臥している、夢中に大伴黒主が神となつて現れ、夜神楽を奏し颯爽と神舞を舞います。

狂言「文荷」(ふみにない)

太郎冠者と次郎冠者は、主人から少人(稚児)に宛てた恋文を届けるよう命じられます。二人は道々文を押し付け合いますが、なかなか進まないのので文を竹竿に結び二人で担ぐことにします。能「恋重荷」の一節を諷いながら運んでいくと、何故か文が重く感じられます。中身の気になる二人は、とうとう文を開けてしまひ…。

能「巴」(ともえ)

木曾からやつて来た僧は粟津ヶ原で女に出会います。僧が声をかけると、女は僧が木曾から来たことを知り、ここは木曾義仲が最後に自害した場所なので、祀られている義仲と一緒に手を合わせて欲しいと頼みます。夕暮れが近づき、僧に感謝しつつ女は去って行きますが、夜になり、今度は甲冑姿で長刀を手に現れます。女は巴御前の霊と名乗り、義仲の最後と自分の戦いを見せ、義仲の命令で木曾に戻らねばならなかつた恨みを述べます。

能「小塩」(おしお)

春の大原山に花を見に来た男は桜の枝を掲げた風流な老人に会います。老人は昔を思い出して大原山の桜を愛で、神代のことだと思ひ出されるとつぶやきます。男は不審に思ひその事を尋ねると、老人は昔二条の后が大原山に花見に訪れた際、同行していた在原業平が、後に秘めたる恋心を神代の事として歌を詠んだ事などを語り、夕暮れ時になつてその姿は人ごみに紛れて消え失せてしまひます。その夜ありし日の業平が優雅な姿で現れ、花の下で典雅な舞を舞います。

12:00

志賀

ツレ佐野 玄宜
シテ和久莊太郎

ワキ野口 能弘

ワキツレ殿田 謙吉
" 館田 善博

間中村 修一

大鼓 大倉慶乃助
小鼓 清水 和音
太鼓 大川 典良
笛 熊本俊太郎

後見 朝倉 俊樹
小林 晋也

地謡

木谷 哲也
辰巳 和磨
金森 良充
内藤 飛能

小倉伸二郎
野月 聡
大友 順
亀井 雄二

13:20

文荷

内藤 連

野村 遼太
月崎 晴夫

13:55

巴

シテ今井 基

ワキ御厨 誠吾

ワキツレ野口 琢弘
" 吉田 祐一

間野村 裕基

大鼓 佃 良太郎
小鼓 船戸 昭弘
笛 成田 寛人

後見 宝生 和英
高橋 憲正

地謡

上野 能寛
金井 賢郎
金森 隆晋
佐野 弘宜

高橋 雅之
藤井 次郎
辰巳 満次郎
澤田 宏司

15:25

小塩

シテ渡邊 茂人

ワキ則久 英志

ワキツレ大日方 寛
" 梅村 昌功

間竹山 悠樹

大鼓 高野 彰
小鼓 森澤 勇司
太鼓 澤田 晃良
笛 小野寺竜一

後見 山内 崇生
當山 淳司

地謡

藤井 秋雅
田崎 甫
金野 泰大
辰巳 大二郎

水上 優
佐野 由行
今井 泰行
藪 克徳

次回予告

二〇一九年五月十八日(土)
正午始

俊成忠度 金井 賢郎

加茂物狂 佐野 玄宜

石橋 金森 良充
ツレ辰巳和磨

終演予定 十六時五十五分頃